

今までこの業界に限らず、私はいろんなボスに雇われてきた。「十人十色」とはよく言ったもので、同じ会社組織の頂点という立場でも、各人その思想、思考、哲学などはそれぞれ全く異なっており、商売に対するアプローチの違いを垣間見る度に、成功の方程式は複雑であり怪奇であると思わずにいけない。

ただ、今までの私のボスに共通して言えることがある。それは、「強烈なバイタリティ」である。だからこそボスの人柄に惹かれ、また尊敬し、忠誠を誓えるのであるが、それにしてもこのレース業界においては特に、どこからみなぎるのか不思議なほどの「バイタリティ」を感じる。

おそらく「負けず嫌い」や、単純に「好き・嫌い」という、人間の根幹を成す部分がとてもハッキリしている・・・というか、いつまでも少年のココロを忘れていない辺りにこの「バイタリティ」の源があるのだろう。

根幹がハッキリ・スッキリしていて、人柄が見えやすいから、お付き合いをしていると、とても気持ちが良い。やはり、「これは好き、これは嫌い」とはっきり言えるヒトはキチンと自分の哲学や解釈を持っているし、例えその価値観が自分と異なっていたとしても、個人の思惑とは別に、理解は出来るものだ。

さて、今まで私を使ってくれたボスの中で、ウエストの神谷しゃちよだけは別格である。勿論、レース業を通じての尊敬は当然ながら、実は、神谷しゃちよは私にとって、「ボス」という一言では片付けられない存在だ。

言ってみれば、それは人生の師であり、時に父親のようである。まだまだ社会性・人間性の未熟な私にとって、しゃちよの叱咤はまさに活路を開き、未熟故にコトの善悪に迷う時、正しく道を指し示してくれる。人間として絶対的な信頼の出来る数少ないヒトなのだ。

かつて、神谷しゃちよの下を離れ、その間他社で働いたり、様々な活動をして、今再びしゃちよの下にいる。これには色々理由があるのだが、それはともかく、秀吉が信長に尽くしたように、やはり雇われる以上、将来への希望に溢れ、確固たる信念を持ち、かつ全幅の信頼を寄せることの出来るヒトの下で働きたいモノである。これはサラリーマンとして最も重要なキーポイントの一つかもしれない。

この先、レースという文化が日本でどのように変わっていくのか、それは未だ分からない。しかし少なくとも、しゃちよの下で共に歩んで行けば、きっとそれはそれで納得の出来る結果を残せるかもしれない。いずれにしろ、どこまでのコトが出来るかはともかくとして、社員として利潤を追求するだけでなく、恩返しの一環として何らかの力添えが出来ることを願うばかりである。

